

道東タイムスリップ

②新得、宇井農場<前編> ～人間を動かすもの～



北海道有機農協において、40年ほど前に新規就農し有機農業の拡大をスタートさせた、第一世代にあたる新得の農家を紹介しています。ふたりめは、宇井農場の宇井宏さんです。過酷とも思える環境下で、何が有機農業に向かわせるのでしょうか。昔のままの風景、変わらぬ農法に、時が戻ったように見えますが、おやおや、時が止まっているのは大量消費をやめない現代人のかも…。

◀ ニンジンは葉枯れが多く、根の成長が悪かったそう

▼ ゲルは、夏場の高校生らのファームステイで使用。「ウーの森」と名付けた森では、コープさっぽろ主催の「畑でレストラン」が開催されました

東大雪の山々を背景に、どこまでも続く道をタイムマシンのように進んでいくと見えてくる「UJI」の農場看板。よく見るとその緑の文字は青虫のイラストのようです。キャベツを作る農家にとって青虫といえば、それこそ収入に関わるほど厄介な存在のはず。そんな青虫がお出迎えというのですから、この農家の姿勢は、なるほど子どもにとっても外国人にとってもすでに一目瞭然。

中へ進むと草が短く刈られ陽射しの気持ちいい森に、フクロウの造形物、そして手製のブランコ。こぎれいに手入れされた庭の先には、モンゴル遊牧民の移動式住居、ゲルが見えます。就農時から補修して使われ続ける納屋や住居の前には愛犬（ジーコ）がしっぽを振り、家の中に入ると猫が、そして続けて若い外国人が階段から降りてきました。さまざまなもののが存在しながらも自然と一体となっているような、なんとも不思議な空間です。

宇井さんは千葉県出身、今年65歳。子どもたちはすでに独立し、今は奥様の茂子さんと二人暮らし。積極的にWWOOF（ウーフ／主に海外からの住み込みボランティア）を受け入れており、先ほどの若い外国人もスロベニアからきたウーファーでした。農場は260アール弱（約160m四方）の広さ。野菜は宮下農場と同じジャガイモ、カボチャ、ニンジン、トウモロコシ、キャ

ベツ、ハクサイ、ダイコン、ソバの8種でこちらもハウスではなく、春に撒いて収穫は秋だけ。雑草取りと収穫は、機械も使用しますがメインは手作業です。今年はやはり高温による虫の大量発生でキャベツ、ハクサイが減収、ニンジンも例年の1/4くらいになりました。

そんな宇井農場のはじまりは、茂子さんと二人、自転車で日本一周の旅へ飛び出したことがきっかけでした。時代は高度成長期の大量生産、大量消費の始まりの中。「このまま東京にいても消費するだけ。消費するよりも、生活を作っていくたいと思ったんです。」立ち寄った浜中町の牧場でアルバイトをする中で、初めて農業というものを意識したり、その後、縁があって新得の農家にたどりつきました。

「ニワトリ小屋だったところなら住んでもいいよ」

この言葉を聞いてそこで農業研修を受け、新規就農を果たしました。電気も水もないその小屋は15坪（約30畳）くらいの広さで、明かりはランプを使い、水は地面に深く鉄管を打って汲み上げて得ていたといいます。なんて不便で、なんて過酷な環境と思ってしまいます。宇井さんにとってはそれは、憧れ続けた「自由」の獲得でした。そして宇井さんにはもうひとつ、広げたかった自由の翼があったのです。

（つづく）



▼ ソバの島立て風景。現在はほとんどがコンバイン収穫、人工乾燥で、畑での完熟、自然乾燥はほとんど見かけなくなりました



▼ カラ竿という棒でソバの実を落とすソバ落とし。貴重な光景が見られました

